

...BUNYODO...

寺の瓦

志木山

旅中
日記 寺の瓦 著者志賀直哉木下利玄山内英夫

昭和四十六年一月二十五日初版印刷昭和四十六年二月五日初版發行發行者山越豐發行所中央公論社東京都中央區京橋二丁目一番地振替口座東京三四電話代表東京五六一—五九二一印刷大日本法令印刷製本小泉製本

定價一五〇〇圓

日 旅

記 中

寺 の 瓦

志賀直哉
木下利玄
山内英夫
註・里見弴

序幕

親爺から「勝手に失せやがれ」と、一喝されて、くる／＼と木挽町、スツポンにどつさりと落ちたが、
やゝあつて、人ごみの埃むら／＼と立つ中から、ぬつと出でたる
三つ弾正、

「己れ三人もう行くか」

と云ふ間もあらせず、西方さして霧の如くに消失せる。

三月廿六日

於歌ブキ座

男之助

中 幕

かけ違へて永らく一座しなかつたのに 今度此の度 久々の御一座
向ふ三軒片隣り ブーイと御ひいき……

ハネぎはになつてこんな事を書けなんて迷惑なはなしだ

三月廿六日

於歌ブキ座

藤花生

註

「序幕」の筆者は、「註釋者のあと書き」にもある如く、細川護立。たぶん幕間に、
(志)から「なんか書いてくれないか」とでも言はれたのだらう。その折の演目「伽羅千代萩」の「床下」の臺詞をもちつたり、「男之助」と署名したり戯作調、いかにも明治らしい長閑さだ。

「中幕」の筆者・米津の、「藤花」はもちろん雅號だらうけれど、同級の（志）も名を失念してしまつた由。文中「向ふ三軒片隣り」とあるのも、平土間の狭くるしい枿のなかに、肩々相摩してゐる五人の姿勢を彷彿とさせてはゝ笑ましい。

自序

「寺の瓦」は木下、山内、志賀が三月廿六日からの半月間の旅行記である。

それは他人へ見せるよりは自分等の思ひ出の種にしようといふのが主である。だから文章でも字でも随分亂暴だ。他人には讀めない程亂暴で、又マヅイ。然しそこが吾々にとつて又面白いので、(面白いかどうか知らぬが面白いとするのだ)疲勞しきつて、宿屋へつく、何をするのもイヤだ。其ウンザリしてる中で筆まかせにダラ／＼と其日の事を書く。いゝ文の出来る筈はない。その文のヘマな所に旅のツカレ、氣のオトロへ¹が、現はれてゐて、面白い。木ノの所謂「千金丹の味」²はそこにあるのだ。

四月十日³

註

1 「氣の衰へを感じる」といふ表現は、當時の文壇（主として自然派）の慣用語の一つだった。

2 四月一日の條下（四十九頁）（木）の文中に「千金丹をくふ」とあり、同二日の條下（六十一頁）には「兎角浮世は千金丹の味ぢやわい」ともある。その頃はやつた懷中常備藥で、たぶん越中富山の製品だったらう。後年の仁丹などの先驅。

3 歸京した翌日の日附。

◎三月廿七日 歌舞伎座より〔伊賀〕上野

○ヒル〔午¹²〕名古屋でキシメン〔蕎麦麵〕といふ、サナダ蟲〔條蟲〕のやうなウドン〔饅頭〕を食ふ。(志)

○大井川あたりから夜が明ける。熱田で下りて熱田神宮に詣ります。¹（その前に誓願寺と云ふのある頼朝誕生地を見る）これより白鳥御陵へ参拜して、きたない名古屋の町をぬけます。この間大須の観音²を見物する、午後一時四十分名古屋發の汽車で上野についたのは午後五時、高原の春は寒い。³（木）

○寒いのは只もう不愉快だ、空腹なのは可笑しくなつたりするとた

かいがなくなつて面白い、咽の渴いたのは口がねとくして心地が悪、睡いのは脳髓が眞綿でつつまれた様になつて眼がしよぼたれてたまつたものでない。車夫が車を勧めるのが可笑しい。⁴ シャンペ
ンサイダーはうまかつた、「釣り燈籠のあかりに輝し」⁵ がはやつた。

(山)

○マア昨晚風「風邪」を引かなかつたのが、恵みさ。

此宿屋には湯がない、それで錢湯へ行けく¹と切「頻」りにすすめた。
(志)

註

- 1 (木)は、音聲でも作文でも、とかく人眞似^{ひとまね}がうまく、忽ち對象の特徴を捉へては、みづから可笑がつてゐる。「詣ります」とか、「ぬけます」などバカ丁寧な言葉使ひにしても、たしか某役者の某役での臺詞^{せりふ}がオリヂンだつたらうと思ふが、それがなんだつたかは思ひ出せない。

- 2 『若き日の旅』には、

(前略) 大須の観音にはいり、裏へぬけて、二階三階の家並、落語家の謂ふ「錦の裏を返したやうな」晝の静閑、——すぐ、はゝアと勘は働いたが、黙つてゐた。年嵩の志賀さへ「遊廓だね。そつちイ曲らうか」などと、すまし込んで云ふくらゐのわれ／＼だつた。

とあり。また、

(前略) やがて薄汚い名古屋の町はづれにかゝると、小さな劇場の繪看板に、泉鏡花原作、「靈象」と出てゐる。むろん先生は、夢にも御存知ないことだらう。

3 「高原の春は寒い」は藤村調のつもりに違ひない。

4 「車夫が車を勧めるのが可笑しい」は、初めて耳にする伊賀の上野邊の田舎訛りが滑稽に聞こえたのだらう。

5 當日の演目中「大喜利」の「かつぽれ」で、十五世羽左衛門の臺詞。詳しくは、「註釋者のあと書き」(百六十二頁)にあり。

月の瀬百句 鶯溪浴花亭にて

梅に見えぬ隣の宿や笑ひ聲（木）

一ぶくの煙ごしに見る月の瀬の梅（志）

雲を見る鶯溪や梅のはな（木）

月の瀬に月並を吐く男かな（志）

謠^{うた}うたふ茶屋の主人も鶯花溪（木）

此の「も」も碧梧桐調（木）

おのれも只のもぢやあんめえ¹（志）

このも²も只のもぢやあんめえ（木）

ベランダのはり出しに出でて梅を見れば

背ほかくと睡氣さすなる

「ベランダのはり出し」は、「ビードロの硝子」「テーブルの足高机³」と同類項にてこれも只のではないのだよ（山）

山を背に流を前にシヤモを食ふ⁴（山）

飯らしき飯を食ふ日や梅の花（木）

精神のふやける頃や梅の花（木）

澤庵を洗ふ女子も梅の宿（志）

人力の異人珍らし梅の宿（合作）

シヤッ脱げば稍肌寒き梅の宿（木）

月ヶ瀬や悲劇の種の端書き哉

（繪端書の中によいのと悪いのとありて出すのに喧嘩が起る、仇打ちになる。故に此の句ありと知るべし）

春風に百圓札を飛ばしけり⁵（志）

さつき川 月が瀬橋⁶

案内者は月の瀬と云ひ宿の女は月が瀬と云ふハテ……

「ざつとすい羊羹だすなあ」

「梅のしにしてうらはる」

「えらいうまい事あらしまへん」⁷

すぐ近い處で山道が折れ曲る、その向から俤がくる、女がくる、月が瀬の春は今である。（今です）

のぼりきて憩ふ峠の松かげに
肌ひや〈と春の風吹く

谷とびこゆるかけすかな₉

春風や笠置へこゆる俳諧師₁₀

しかもそいつが親子なりけり

三人してあろがり下る春の山

歩くと云はんにはあまり勞力を要せずころがるでは又あまりに角ばる、そこであろがるなり。

聲色つかひの群は卑しい聲色をつかひながら山道を下つてゆきました₁₁
(木)